

万葉集3241番歌の「難乞禱」の解釈について

竹生 政資¹, 西 晃央²

An Interpretation of the Second Phrase of the 3241st Poem in Manyo-shu

Masasuke TAKEFU, Akihiro NISHI

要 旨

万葉集3241番歌の原文の第二句は「難乞禱」となっているが、長らく賀茂真淵の誤字説により「難」を「歎」の誤字として「歎き乞ひ禱み」と訓まれてきた。しかし最近では、「難」の字に「うれふ」の訓みがあり、和語「うれふ」に「歎き訴える」の意があることから「難乞禱」は「うれへ乞ひ禱み」と訓まれ「嘆き訴えながら願い祈る」の意に解されている。

しかし、これらの訓みと解釈にはいずれも疑問がある。この第二句は佐渡島に流された作者が天地の神々を祈るという内容であるが、天地の神々を祈る人が、神々に対して「嘆きながら」祈ったり、「訴えながら」祈ったりするだろうか。神への祈りは、昔も今も「堅く」あるいは「ひたすら」祈るのではないだろうか。このような視点から第二句の「難乞禱」について再検討を行った結果、「難」を「かたく」と訓み「堅く」の意味に解するのがもっとも適切な解釈であるという結論に至った。その根拠については本文で詳述する。

1. はじめに

万葉集3241番歌は巻十三の「雑歌」の中の一詩であり、左注によると作者の穂積朝臣老が佐渡島に流された時の歌である（詳細は以下の①の注釈を参照）。まず歌の内容（訓読文と原文）を新日本古典文学大系本に従って掲載する [1]。この歌は反歌であるが、長歌（3240番歌）の内容は以下の考察にとって必ずしも必要ないので省略した。また、原文および訓読文の旧字体は新字体で置き換えた。

13/3241 天地を ^{あめつち} 憂へ ^{うれ} 乞ひ ^の 禱み ^{さき} 幸くあらば またかへり見む 志賀の唐崎

右二首。但し、この短歌は、或る書に云く、「穂積朝臣老の佐渡に配せられし時に作りし歌なり」といふ。

【原文】 天地乎 難乞禱 幸有者 又反見 思我能韓埼

【現代語訳】 天地の神に訴え願い祈って、もし無事であったならば、また帰って来て見るだろう、志

¹ 佐賀大学 医学部 地域医療科学教育研究センター (takefu@cc.saga-u.ac.jp)

² 佐賀大学 文化教育学部 理数教育講座 (nishia@cc.saga-u.ac.jp)

賀の唐崎よ。

以下の議論で問題にするのは第二句の「難乞禱」である。それ以外の句については訓み、解釈ともに問題はない。そこでまず、第二句に関する部分について、これまでに出版された代表的な万葉集注釈書に掲載されている訓読文、現代語訳、注釈を出版年の新しいものから順に掲載することにしよう。記載形式をそろえるため内容に影響を与えない範囲内で順序や記号表記などを一部変更し、漢字の旧字体は新字体で置き換えた。

①新日本古典文学大系^[1]

【訓読と現代語訳】「^{うれ}憂へ乞ひ^の禱み」と訓み、「(天地の神に) 訴え願ひ祈って」と現代語訳。

【注釈】第二句の原文、諸本「難乞禱」。「難」を「歎」の誤りとする万葉考の説が行われてきたが、原文のままウレヘコヒノミと訓む説(橋本雅之『万葉集』卷十三・三二四一番歌「天地乎難乞禱」の訓釈について)皇学館論叢二十卷一号)に拠る。「難ウレフ」(名義抄)。「うれふ」は嘆き訴える意。「京兆(みさとづかさ)」に出でて訴(うれ)へむ(三八五九)。「乞ひ禱む」の語、既出(九〇六)。続日本紀によれば、養老六年(七二二)正月二十日、「正五位上穗積朝臣老乘輿を指斥すといふに坐せられて」斬刑に処せられるところ、皇太子(後の聖武天皇)の奏上によって死一等を減じられ佐渡島に配流、在島十八年、天平十二年(七四〇)六月に放免された。

②新編日本古典文学全集^[2]

【訓読と現代語訳】「^{うれ}訴へ乞ひ^の禱み」と訓み、「(天地の神に) 無実を訴えて祈り」と現代語訳。

【注釈】天地を訴へ乞ひ禱み——この天地は天ツ神・国ツ神をさす。訴へ乞ひ禱みの原文は「難乞禱」とあり、一般には「嘆乞禱」の誤りとする『万葉考』の説が行われている。しかし、「難」にはカタシの他にウレフ(憂)の訓もあり、ウレフには訴える意があるのによってウレヘコヒノミとする説による。

③講談社文庫(中西進)^[3]

【訓読と現代語訳】「嘆き乞ひ^の禱み」と訓み、「(天地の神を) 嘆きつつ祈り願ひ」と現代語訳。

【注釈】嘆き——原文「歎」、諸本は「難」。考の誤字説による。「難」のままコヒノミガテニともよめるが「哥をしらぬものゝしわざぞ」(考)という。

④万葉集注釈(澤瀉久孝)^[4]

【訓読と現代語訳】「歎き乞ひ^の禱み」と訓み、「(天地の神に対して) 歎きお祈りして」と現代語訳。

【注釈】天地を歎き乞ひ禱み——「天地を」は「天地乃^{アメツチノ} 神祇乞禱^{カミツコヒノミ}」(三・四四三)と同じである。原文「難」とあるを考に「歎」の誤としてナゲキコヒノミとし「今本歎を難に誤て、こひねぎかたし、と訓しは、哥をしらぬものゝしわざぞ」と云つた。「歎」を「難」に誤つた例は他に無いが、「歎」を「歎」に版本に誤つた例(四・六五〇題)はあるので、まづこの誤字は認むべきものと思ふ。私注には「難」のまゝでナニニコヒノミと「何の為に乞ひ祈るのか」と訳され、「真淵のナゲキコヒノミは、実に名訓なので、疑ふ後人もなかつたが、ナニニコヒノミでも十分意をなすので、其に従ふより外ない」と云はれたが、「難」を「何」に借りた例(三二四九、三二六五)はあるにしても、かうした「名訓」は生かすべきものだと私は考へる。

⑤日本古典文学大系¹⁵⁾

【訓読と現代語訳】「嘆き乞ひ^の禱み」と訓み、「(天地の神々に) 切に願ひ、叩頭して祈り」と現代語訳。
 【注釈】(第二句に関する注釈なし)。

次の第2節では上に示した五つの先行研究の問題点について検討し、続く第3節でこれらの問題点を解決できる新たな解釈を提案する。

2. 先行研究における問題点

前節に示した五つの先行研究の結果にはいくつか問題点がある。③、④、⑤はいずれも「難」を「歎」の誤りとする誤字説をとっているが、第二句の原文には写本による異同がなく、これに誤字が含まれる可能性はきわめて小さい。誤字説をとる根拠として、④は「難」を「歎」に誤った例はほかにないことを認めながらも、650番歌の題詞に「歎」を「歎」に誤った例があることをあげている。しかし底本(西本願寺本)にはこの誤字はない。底本とは全く別の写本の中に「歎」を「歎」に誤った例がわずか一例あるからといって、底本に「難」→「歎」の誤字がありうるとは必ずしも言えない。

ところで、仮に「難」を「歎」の誤字と認めたとしても、第二句を「歎き乞ひ禱み」と訓むことには別の問題がある。それは「何を」歎くのかである。この点に関して、③は「天地の神を」嘆きつつ、④は「天地の神に対して」歎き、と解している。⑤は「嘆く」を特に訳していない。そこでまず「嘆く」という行為が「神に対して」向けられることがあるのかどうかについて検討してみよう。もしないことが示されれば第二句を「歎き乞ひ禱み」と訓むことは妥当でないことになる。

まず始めに確認しておきたいのは「なげく」という言葉の意味である。同じ言葉でも上代と現代では意味が大きく異なるものがあるから、念のため上代における「なげく」の意味を確認しておこう。『時代別国語大辞典上代編』によると「思いのままにならないことをかこつ、悲しむ、嘆いて溜息をつく」という意味である([6], p.521)。これは現代語とほとんど同じ意味である。

次に確認したいのは、人が神に祈るとき、「神に対して」嘆きながら、あるいは「神を」嘆きながら行うような人が果たしているかどうかである。この歌の作者は、第1節の①の注釈に詳しく説明されているように、罪を犯して佐渡島に流されることになり、何とか無事に生きて帰れることを神に祈り、その時の気持ちを詠んだのが3241番歌である。このような人が、神に対して不平・不満を言ったり、神に対して悲しんでみたり、神に対して溜息をついたりするだろうか。おそらくしないだろう。というのは、神は人間を超えた存在であり、すべてを知っているからである。神に対して人間ができるのはただひたすら祈ること(および乞ひ願うこと)だけではなかろうか。もしこの人が嘆いたとすれば、それは「神に対して」ではなく、「自分の不運」に対してであろう。だとすれば、③や④のように「天地の神を嘆きながら祈る」という解釈は、人間の行う行為としては不自然だと言わざるを得ない。このことを確かめるために、万葉集中の「嘆き」の歌を調べてみると、約60例ほどあるが(名詞形および動詞の活用形をすべて含む)、人の死を嘆いたり、恋人と逢えないことを嘆いたりするなど、いずれも「自分の力ではどうにもならない不幸な出来事に直面してそのこと自体」を嘆いているのであって、「神に対して」嘆いている例など一つもない。

一方、①と②は誤字説によらず原文「難」のまま「うれへ」と訓み「嘆き訴える」の意に解している。ところが、「訴える」という行為は「人間」相手に行うものであり「神」に対して行うものではない。「事情を訴えて心からお願いする」という意味の「嘆願」という語があるが、これは役所や有力政治家や裁判

所など、わが身について事情をよく知らない「お上」に対して事情を説明してお願いする（訴える）ことであり、要するに「人間」相手の行為にほかならない。「神」はすべてを知っているから「説明する」必要もないし「訴える」必要もない。このことは次の歌が証言している。

04/0561 思はぬを 思ふと言はば 大野なる 三笠の杜の 神し知らさむ

心にもないことを言って人間は騙せるが、神はちゃんと知っている、という内容の歌である。同じような内容の歌は655番歌、3100番歌にもある。

奈良時代の祈りがどのようになされたかを示すよい例の一つを示そう。次の歌は山上憶良が最愛の息子を「横しま風」（病気名）によって亡くしたときに詠んだ歌（後半部のみ）である。

05/0904 思はぬに 横しま風の にふふかに 覆ひ来ぬれば せむすべの たどきを知らに 白
たへの たすきを掛け まそ鏡 手に取り持ちて 天つ神 仰ぎ乞ひ祈み 国つ神 伏してぬかつき
かからずも かかりも 神のまにまにと 立ちあざり 我乞ひ祈めど しましくも 良けくはなしに
やくやくに かたちつくほり 朝な朝な 言ふこと止み たまきはる 命絶えぬれ 立ち躍り 足すり
叫び 伏し仰ぎ 胸打ち嘆き 手に持てる 我が子飛ばしつ 世間の道

この歌には「乞ひ祈む」という表現が二度も出てくるが（第一の下線部）、「すべては神の意のままに」と祈っているものであり、神に対して「嘆いたり」や「訴えたり」はしていない。結局、憶良の神への祈りは届かず息子は死んでしまうが、その後ではじめて胸を打ちながら「嘆いている」のである（第二の下線部）。決して祈っている途中に嘆いてはいない。万葉集には「乞ひ祈む」という表現がほかにも5例あるが、「嘆きながら」あるいは「訴えながら」行われている例は一つもない。

ちなみに、第1節の①の注釈に引用されている橋本雅之氏は、3241番歌の「難乞祈」を「うれへ乞ひ祈み」と訓み、同じ用法の「うれふ」の例として次の三つをあげている [7]。

- (1) 風交じり 雨降る夜の 雨交り 雪降る夜は 伏せ廬の 曲げ廬の内に 直土に 藁解き敷きて 父母は 枕の方に 妻子どもは 足の方に 囲み居て うれさまよ... (万葉集・892番歌)
- (2) しかして、その御祖の命、哭き患へて天に参上り、神産巢日の命を請はしし時に、すなはちキサ貝比売と蛤貝比売とを遣はして作り活けたまひき。(古事記・上巻)
- (3) 攻めむとする時は、塩盈珠を出でて溺らし、それうれへ請はば、塩乾珠を出でて救ひ、かく惚まし苦しめたまひし時に、稽首みて白ししく、(古事記・上巻)

しかし、この三つの「うれふ」はいずれも3241番歌とは状況が異なっている。まず(1)は山上憶良の貧窮問答歌の中で寒い夜を過ごす貧しい家族の様子を詠んだものであるが、この歌の「憂へ吟ひ」は「(妻子が寒さのために) 憂え悲しんで呻く」の意であり、ここには「訴える」の意は含まれていない。というのは、彼らは極貧の人々であり妻子が家の主に寒さを「訴えた」ところで状況が改善される見込みはないからである。むしろ妻子は「諦めて」憂え悲しんでいると解すべきであろう。しかし、仮にここの「うれふ」に「訴える」の意が含まれていたとしても、それはしよせん「人間」相手の行為であり3241番歌とは状況が異なるのである。

次に(2)の「哭き患へ」であるが、これは「泣き悲しんで」の意であり、ここも「訴える」の意は含まれ

ていない。というのは、(2)の内容は、大穴牟遲神（大国主命）が兄弟の八十神たちから迫害されて殺されたとき、その母親神がこれを見て「泣き悲しみ」、それから天に参上して神産巢日命のところに行き、そこで自分の子の生還を請う、という内容だからである。母親神の「哭き患へ」は地上での行為であり、ここにはまだ訴えるべき相手（神産巢日命）はいない。もっとも、天に参上した後に神産巢日命に「直訴」したのかもしれないが、この場合の「訴える」は「神」と「神」との行為であり、空蟬の人間が天地の神々に対して行う祈りの行為とは次元が異なる。

一方、(3)の「それ愁へ請はば」は、「(兄の海幸彦が弟の山幸彦に対して)嘆き悲しんで命乞いをしたら」という意味である。したがって、ここの「愁へ」は「嘆き訴えながら」と「訴える」の意を含ませて解釈してもよいかもしれない。しかし、この場合の「嘆く」や「訴える」は「人間」相手の行為であり3241番歌とは状況が異なる。

以上見てきたように、従来行われてきた解釈は①から⑤のいずれも、解釈としては一見もっともらしく見えるものの、すべて「人間」相手の「嘆願」行為としての解釈であり、天地の神々に対する祈りの行為としてはきわめて不自然な解釈だといわざるを得ない。ちなみに、延喜式祝詞には祈年祭をはじめ多くの祝詞が含まれているが、この中にも神に対して「嘆きながら」祈ったり、「訴えながら」祈ったりする例はない。

3. 「難乞禱」の新しい訓みと解釈

前節で指摘したように、3241番歌の第二句「難乞禱」は、誤字説により「嘆き乞ひ禱み」と訓むことも、また誤字説によらず「うれへ乞ひ禱み」と訓むことも、いずれも問題があることが明らかとなった。それでは、ほかにもっと適切な訓み方があるだろうか。結論から言うと、原文のまま「かたく乞ひ禱み」と訓み「かたく」を「堅く（しっかりと、ひたすらに）」の意に解することである。

13/3241 天地を かたく乞ひ禱み 幸くあらば またかへり見む 志賀の唐崎

以下、このような訓みと解釈が可能であることを根拠をあげて示そう。

まず万葉集における「難」の用例について調べてみる。万葉集には「難」の用例が多数あるが、その中から「難波（なには）」、「子難（こがた）」という地名に関するもの、「な」および「なに（何）」の音仮名として用いられているもの、それに3241番歌の「難乞禱」を除くと33例が残る。この33例を調べてみると、次に示す2例を除きほかはすべて動詞に付いて「～するのが難しい（ので）」を意味する補助動詞「かつ」の用法（「かてに」、「かたき」、「かたし」など）か、あるいは「難しい」を意味する形容詞「かたし」の活用形として用いられている。例外は次の二首である。

07/1192 白たへに にはふ真土の 山川に 我が馬なづむ（吾馬難） 家恋ふらしも

11/2568 おほろかに 我れし思はば かくばかり 難き御門を（難御門乎） 罷り出めやも

1192番歌の「難」は「なづむ」と訓まれているが、意味は「(馬が) 難渋する」であり、「(馬) 行きかてにす」と内容的には同じである。よって、この歌の「難」は先に述べた補助動詞「かつ」の用法と基本的には同じである。一方、2568番歌の「かたき」は「嚴重に守られた（御門）」の意であり、「難しい」の意ではない。「堅い、しっかりとした、嚴重な」の意である。

以上のことから、万葉集には用例がわずか一例しかないけれども、「難」を「かたく」と訓み「堅く」の意に解することは可能であろう。すなわち、3241番歌の第二句「難乞禱」を「かたく乞ひ禱み」と訓み「堅く願ひ祈って」と解するのである。このように解すると文脈にもピッタリ合う。ちなみに、万葉集と日本書紀歌謡の「かたく（堅く）」の用例を以下に示す（丸カッコ内は原文）。

12/3113 ありありて 後も逢はむと 言のみを 堅く言ひつつ（堅要管） 逢ふとはなしに
日本書紀歌謡78番歌 … 大君に 堅く（柯拖俱） 仕へ奉らむと 我が命も 長くもがと…

ところで、もし「難乞禱」の「難」が「かたく＝堅く」の意味だとすると、なぜ正訓表記の「堅」の字を用いずに通常は「難しい」を意味する「難」の字が用いられたのだろうか。おそらく、この「難」という字は、天地の神々に対する作者の気持ちが「変わるのが難しい」、すなわち「作者の信仰心がゆるがない」ことを表しているのだろう。「かたし」という上代語には「難しい」と「堅い」の二つの意味があるが（[6]、p.192）、このことは「難しい」と「堅い」がもともと非常に近い概念であることを示している。実際、「堅い」という意味を比喩的に抽象化すれば「難しい」になる。英語の「hard」にも「難しい」の意のほかに「堅い」や「熱心な」の意味がある。したがって、「難」の字が「堅く」の意に用いられたとしても（用例は少ないけれども）何ら不思議はないのである。このことを実例で裏付けているのが先にあげた2568番歌である。

4. おわりに

本論文では、万葉集3241番歌の第二句「難乞禱」について再検討を行い、従来のように誤字説により「嘆き乞ひ禱み」と訓むことも、また誤字説によらず「うれへ乞ひ禱み」と訓むことも、いずれも問題があることを指摘した。その理由は、この第二句が天地の神々を祈る行為を表すものであるため、「嘆きながら」祈ったり、「憂え（訴え）ながら」祈ったりするのは人間の行為として不自然だからである。そこで本論文では新しい訓み方として、誤字説によらず「難」を「かたく」と訓み「堅く、ひたすらに」の意に解することを提案した。このような指摘や提案が妥当なものであるかどうか、多くの方々のご批判をおおぎたい。

参考文献

- [1] 「万葉集三」、新日本古典文学大系、岩波書店、pp.235-236、2002年。
- [2] 「万葉集③」、新編日本古典文学全集、小学館、pp.398-399、1995年。
- [3] 「万葉集原文付全訳注(三)」、中西進、講談社文庫、p.188、1981年。
- [4] 「万葉集注釋卷第十三」、澤瀉久孝、中央公論社、p.54、1964年。
- [5] 「万葉集三」、日本古典文学大系、岩波書店、p.345、1960年。
- [6] 「時代別国語大辞典上代編」、三省堂、2005年。
- [7] 橋本雅之、『万葉集』卷十三・三二四一番歌「天地乎難乞禱」の訓釈について、皇学館論叢、20巻1号、pp.15-23、1987年